パネルディスカッション

コーディネーター：

日本大学経済学部　教授　　周藤　利一

パネラー：

北陸経済連合会　常務理事　　寺尾　重資

財団法人九州経済調査協会　調査研究部次長　　加峯　隆義

全南発展研究院都市研究チーム長　　趙　相弼（チョ・サンピル）

慶南発展研究院地域均衡発展研究センター長　　鄭　在熙（チョン・チェヒ）

第１部　（日韓各パネリストによる事例発表）

「北陸・韓国経済交流会議について」

【寺尾　重資（北陸経済連合会常務理事）】

御紹介いただきました、北陸経済連合会常務理事の寺尾でございます。日韓における地域連携シンポジウムのパネリストとしてお招きいただきまして、大変光栄であります。ありがたく思います。

私からは北陸の経済団体として 12 年間に渡りまして韓国と連携してまいりました、北陸韓国経済交流会議についてご説明をしたいと思います。

韓国から多数の御出席の方がいらっしゃいますので、会議の説明の前に北陸経済連合会及び北陸 AJEC いう組織、それと北陸のポジションについて簡単に御説明をしたいと思います。

まずは北陸経済連合会ですが、3 県、富山、石川、福井という地域でございますが、北陸は 1 つという意識のもとに北陸の 3 県の企業、そして経済団体が集まりまして、自主的に活動すると共に、政府、その他関係機関に働きかけることを目的としまして、1967 年に結成された団体であります。

同様の団体が、広域地方計画の 8 つのブロックと同様に（※ブロック毎の管轄都府県が必ずしも一致ではない）、8 つございます。その目的としましては、北陸地域のあり方、そしてそれを実現するための例えば北陸新幹線、高規格幹線道路、港湾など社会基盤の整備、環日本海交流の促進、産業の振興、そして地方分権の推進などに取り組んでおります。

北陸地方のあり方についても午前中の基調講演の中にもありましたように、北陸圏広域地方計画に反映されております。世界に開かれた日本海における交流の中枢拠点、人々を引きつける、暮らしやすさ日本一を目指すという将来像を掲げており、その戦略目標として 4 つ掲げたわけでございます。

その 1 つとして、日本海側の中枢拠点の形成に向けた交流機能の強化。具体的には国内外に展開する信頼度の高い物流、旅客機能の形成強化、それと太平洋側の安全、安心に貢献する日本海側の防災拠点、ネットワークの強化が織り込まれております。

続きまして、北陸経済連合会の国際部門を実質担当しておりますのが、北陸 AJEC でございます。

北陸韓国経済交流会議の事務局も担当していますので、この組織についても簡単に説明したいと思います。

北陸AJECは1991年に旧ソ連の崩壊によって、冷戦時代が終わりを告げまして、この日本海を通した交流が盛んになるだろうということで、その翌年1992年につくられた組織でございます。これは北陸経済連合会が中心となりまして、北陸地方の産業界、大学、そして富山県、石川県、福井県、産官学が一体となってつくった組織であります。

対岸諸国との経済交流を促進するという目的で設立しまして、本年が設立の20周年の節目にあたっております。

北陸のポジション、特徴について簡単にご説明したいと思います。映しております写真は、富山県が作成しております、通称逆さ日本地図といわれているものでございます。こうして見ますと、北陸が日本海を挟んでロシア、中国、朝鮮と向かい合っていることがよくわかります。まるで日本海というのが地中海のようでございますし、実際に日本海の面積は地中海の大体2分の1と言われております。

最近ではこの日本海が国際物流のメインルートになっていることは、皆さんご存じのとおりかと思います。

またこの北陸のポジションを考える上で、もう1つ非常に重要なことは、環日本海交流の歴史ではないかと思っております。北陸は朝鮮、渤海国との交流の拠点であったところでございます。渤海国との交流は余り知られておりませんが、8世紀から10世紀にかけまして、遣唐使は12回といわれておりますが、渤海使は49回日本に来ております。その窓口が福井県敦賀であり、石川県能登の福浦でございます。琵琶湖を通って、そこから平城京へ行ったということになっております。

敦賀にはゲストハウスである客館の跡地が残っておりますし、福浦には客館と同時に造船所の跡もございます。

もう1つ特徴としてありますのは、欧亜国際連絡列車、皆さんご存じかもわかりませんが、当時新橋から蒸気機関車の切符を買って敦賀へ来ました。敦賀からウラジオストックまで船で行き、ウラジオストックからシベリア鉄道でヨーロッパへ行ったそうです。

有名な歴史としては、与謝野晶子が鉄幹に会いに、このルートを使ってヨーロッパへ行ったということもあります。

このように過去は日本海を介した交流が、日本の表玄関であったのではないかと思っております。

特に今回の東日本大震災を受けまして、北陸地方はこの日本海側の沿岸に位置するとともに、関西、中部、関東の各経済圏とも300キロメートルで介しておりますので、対岸諸国に向けたゲートウェイとしての役割が改めて認識されているところではないかと思っています。

北陸経済のもう1つの特徴は、経済ですが、伝統的な地場産業とか、繊維工業でつるかってきた技術を活かし、現在では電子部品が共通である一方、福井では基礎化学と繊維工業、石川は一般機械と情報通信機器、富山では金属製品と医薬品、化学工業が主力となっております。

また中小企業が多い土地柄ではありますが、ニッチトップ、シェアトップの企業、また海外に進出している企業もたくさんあるところでございます。

北陸企業の強みといたしましては、金型、銅、メッキ等、サポーティング産業の厚み、良質な労働力、さらには、大都市圏と等距離というようないろいろな強みを持っているところでございます。

北陸のシェアトップの企業や、また北陸の観光につきましては会場に置いてある冊子をご覧いただければと思っております。

北陸と韓国との経済交流の状況でございますが、午前中に日本と韓国の経済の関わりがありました。先ほど、日本にとりましては、韓国は中国、米国に次ぐ第3位の貿易相手国ということで、そのシェアは6.2%というお話もありましたが、北陸3県にとってみますと、全国が6.2%ですが、韓国はやはり中国に次いで2番目でございますが、18%という非常に高いシェアを占めております。

いわゆる、北陸地域は3倍も韓国と密である

ということではないかなというふうに思っています。

次に韓国の物流状況についても簡単に触れたいと思います。北陸と韓国の航路はコンテナ船では富山伏木港から週8便、金沢港からは週5便、敦賀港からは週2便となっています。またRORO船が金沢港から1便、敦賀から週2便になっていますが、金沢港のRORO船は主に世界的な建設機械であるコマツの建設機械を運ぶものであり、馬山を経由して世界各地へ運ばれているものでございます。

北陸韓国経済交流会議について、本題について話をしたいと思います。

北陸韓国経済交流会議については、日本と韓国の地方レベルのパートナーシップ構築のために平成12年に第1回を開始しております。これは1成11年に21世紀に向けた日韓パートナーシップをさらに確保するものとして、当時の小渕総理大臣と金大中大統領の中で日韓経済アゼンダ21が合意されたことによります。

まず北陸地域において交流をやろうということで、中部経産局が北陸地域の諸団体に話しかけて開始されたものでございます。

この会議の構成メンバーとしましては、日本は、中部経産局はもちろんですが、我々民間サイドからの要請により、北陸総合通信局、北陸地方整備局、北陸通信運輸局など、いわゆる地方のあり方を考えるような行政、それと富山県、石川県、福井県、そして北陸経済連合会とか、あと3県の商工会議所連合会、ジェトロ（日本貿易振興機構）、日韓産業技術協力財団など幅広い分野での関係機関が集まっております。

一方韓国でございますが、知識経済部、あとは韓日経済協会、韓日産業・技術、協力財団、そして自治体としましては、東の蔚山（ウルサン）広域市、大邱（テグ）広域市、江原道（カンウォンドウ）、慶尚北道（ケイショウホクドウ）のような東海岸との交流になっております。

プログラムとしましては、こういう参加機関のメンバーからお互いの相手国、機関への協力、提携事項についても提案をし、意見交換をするというような会議から始まりました。2回目からはやはり具体的な成果としてのビジネスを出そうということで、商談会、企業プレゼンテーション、地域理解のための地域文化、産業の視察プログラムなど見直しをしております。

その成果としましては、例えば地域間連携としましては、石川県産業創出支援機構と大邱（テグ）のデジタル産業振興院による交流が生まれました。お互いに商談会なり展示会に参加するところもあるのですが、いわゆる第三国展開も行われておりまして、大邱（テグ）デジタル産業振興院が出展するベトナムへ石川県の企業も参加するという事例もあります。

これは先ほど言いました、日韓産業技術協力財団とも協力をしながらやったのですが、ビジネスマッチングを拡大しようという中で中小企業のマッチングサイト、JK-BIC（日韓中小企業情報交流センター）というものの稼働もあります。

またお互いの文化とか、地域を知り合うということで、北陸地方のケーブルテレビと韓国でケーブルテレビ番組を配信しているリビングTVとでお互いのテレビ番組の提供ということの業務提携も行われております。

ただ、こういうことで10回は続けてまいりましたわけですが、お互い意見交換をして、それで何かをやっていこうというような形、官民合同会議というものも形式化されたということ、またあのころはメンバーのフォローも十分ではなかったということもありますが、商談会の参加企業数も非常に少なくなったということで、第11回から見直しという形に入りました。

この見直しにあたりましては、北陸サイドとしましては、このグローバル化の浸透によりましては、今後の東アジアの発展の中では日本と韓国の関係が非常に重要なものと考えておりますし、FTAなど国と国との関係のあり方は無論のことでありますが、グローバル化を進めるためには、ローカルとローカルの関係が今後ますます重要になってくるだろうということ、北陸にとって対岸諸国にある韓国との交流を盛んにするためにいろいろな課題を話し合う場、プラットフォームを設

置しておく必要があるだろうということで継続してやっていこうということです。

プログラムについては内容を見直しますが、引き続きやっていこうというような形で第 11 回目にあたっております。

第 11 回目からは、北陸のニーズ、民間の色合いをもう少し強く出そうということで北陸 AJEC が事務局となりまして、新たなパートナーシップの構築ということを基本テーマにやっております。

具体的には、ダイナミックに戦略的に施策を展開する韓国を韓国行政当局から直接北陸の行政とか企業に知ってもらう。また新たな提携が生まれているということも知ってもらうということから、幅広い北陸の企業に韓国の状況なりを知ってもらうという形であります。

それと具体的なビジネスということで、富山で第 11 回が開催されましたので、富山というのは薬業のある面では都でありますので、薬業をテーマにした分科会、その中から新たな提携が生まれればということでやりました。

第 12 回につきましては、昨年 9 月に韓国の慶州（キョンジュ）で行いました。これは 11 回と同じように、やはり両国の地域の政策、または連携などをお互いに知り合うという場、それと第 11 回に引き続きまして、分科会を開催しました。富山で開催した第 11 回場合には 1 つの分科会だったのですが、韓国で開催した第 12 回の場合は 2 つの分科会に分けました。そのうちの 1 つは、薬業を発展させまして医薬、医療機器、医療観光を含む幅広いテーマとしました。

これは、富山は薬業ですが、石川は医療機器、また福井は陽子線などの幅広い医療分野を対象にして、3 県の企業が取り組みやすいようなテーマとしました。それともう 1 つは北陸というのは食に恵まれたところでございますので、食を中心にした食品加工専門分科会というものをテーマとして分科会を開催しております。

その成果の中から幾つかありますが、まず全体会議の中からは蔚山（ウルサン）の広域市からは観光をテーマにしたもの、また韓国の船社パンスターからは RORO 船を利用した韓国と日本との共同連携ということでありましたが、パンスターの発表者からは、日本海を介した物流は国際交流ではなくて、国内物流とした観点から考えるべきであるし、次回は物流分科会を設定したらどうかという話もございました。

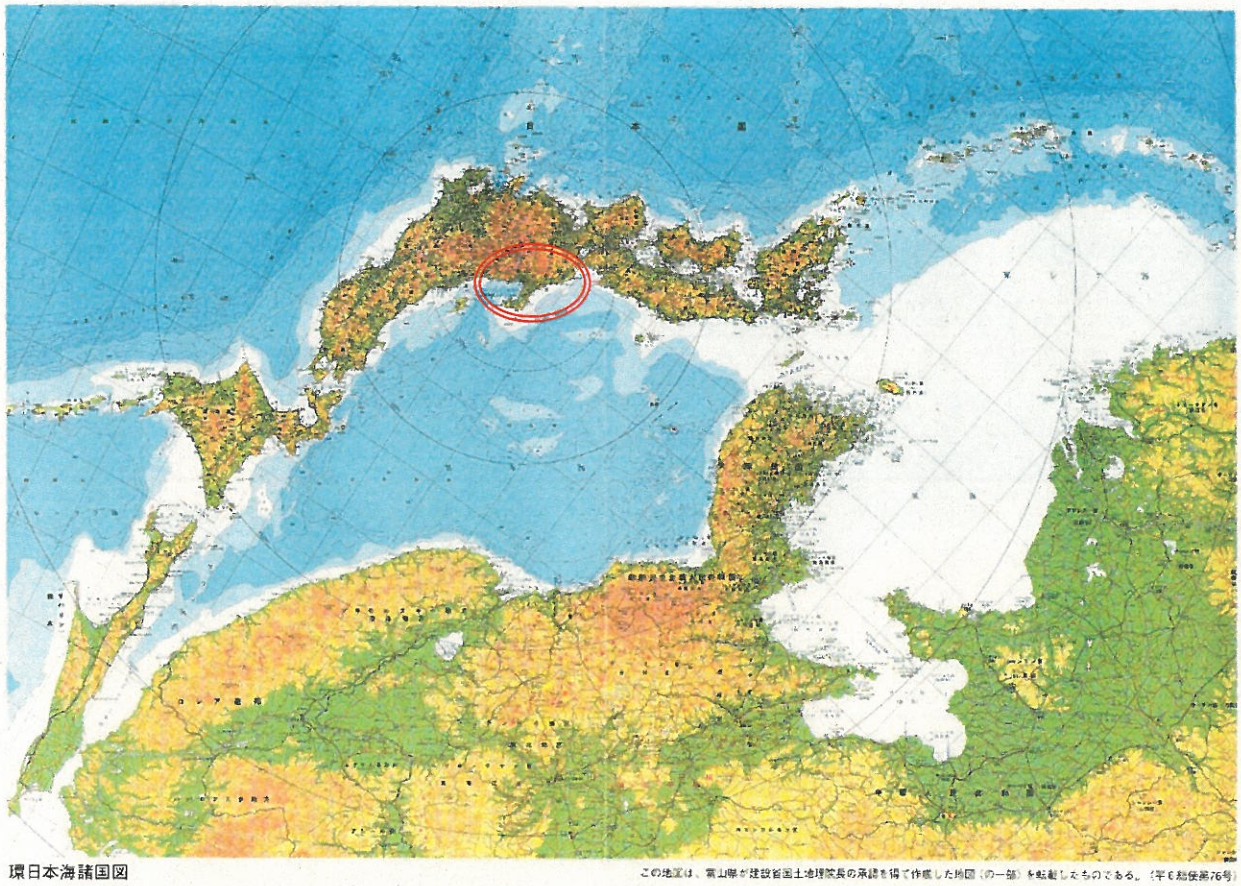
複合医療専門分科会ではいろいろな提案がありましたが、1 つは漢方の日韓中での規格統一を図っていったらどうかという提案がありました。さらには、地域医療の IT 化における両国、地域間の連携、両地域の医療機器産業の特徴、交流促進、陽子線医療と、医療通信における相互連携というものが提案されまして、具体的な成果といいますか、1 つはその中でなされた意見交換の中から大邱（テグ）の慶北漢方産業振興院と北陸・富山県の薬メーカーとで合意がされました。1 つは韓国で調達できる生薬原料を使用し、日韓双方で販売可能な一般開発薬の研究を両国で進める、という旨の合意を成されたということでございます。

また北陸総合通信局からは、北陸情報通信協議会医療介護部会の部会長、石川県能登の総合病院院長が高齢化が進んでいる地域に対し、IT の活用について取り組んでおり、韓国で非常に IT が進んでいるということに合わせて、再度ミッションをそこへ派遣するということや、敦賀で取り組んでいる陽子線治療を介した医療ツーリズムの連携についての協議があったということでございます。

最後に食品加工分科会については、非常に連携が難しいところでございますが、海外展開について一緒にやっていこうとか、お互いの商品についての自国内での販売というようなところの展開についての協力をやっていこうというような話がなされたところでございます。

全体にこういうような会議がございましたが、慶州（キョンジュ）で久しぶりに会議をやったわけですが、北陸の企業は、ソウルは知っているが慶州（キョンジュ）のような都市はなかなか知りません。韓国の地方にしてもいろいろな魅力のある土地があるなということが参加者にとって印象的でありましたし、やはり地域と地域との連携というのは必要ではないかなという感じで思っています。

第 13 回は 2012 年福井県で開催する予定で計画を進めております。



環日本海諸国図

この地図は、富山県が建設省国土地理院長の承認を得て作成した地図（の一部）を転載したものである。（平6総使第76号）